

主体・客体の相違における言語行動の変容：ASD 傾向との関連

林珠里^{†1} 大森幹真^{†2}

早稲田大学人間科学部^{†1} 早稲田大学人間科学学術院^{†2}

1. 問題と目的

自閉スペクトラム症 (ASD) は、社会的コミュニケーションに障害があり、間接的要求のような語用論を含んだ言語表現の理解に困難がある。海外では、定型発達児の間接的要求理解はある程度解明されている (Bucciarelli et al., 2003) が、ASD 児に対する研究は少なく、さまざまな結果が出ている (Kinssine et al., 2012; MacKay & Shaw, 2004)。国内では、定型発達児を含めて発達段階を明らかにした研究は少ない。本研究では、発達障害児を対象に、言語場面と非言語場面での間接的要求の理解と課題遂行中の視線機能を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1 参加者

発達障害診断のある、もしくは発達障害傾向の子ども 29 名 (男児 21 名, 女児 8 名, 平均年齢 8.9 歳, $SD = 2.5$ 歳) を研究参加者とした。

2.2 刺激と装置

視線機能を計測するために Tobii X3-120 を使用した。ASD 傾向を計測する質問紙として、対人応答性尺度 (SRS-2) と広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度 (PARS) 短縮版児童期を使用した。また言語能力を測定するために PVT-R 絵画語い検査も実施した。実験刺激には、非言語場面では 1 枚の図版に「自分」、「相手」、「もの」の 3 つのイラストを配置し、間接的要求を行なっている場面を作成した。言語場面には非言語場面の図版に「文字」を追加し、各 6 種類で合計 12 枚の図版を提示した。

2.3 手続き

参加者に間接的要求課題の 1 枚の図版を 5 秒間提示し、参加者にはその図版を見ることを求めた。黒い背景に切り替わったら、間接的要求の理解を問う質問に対して自由に回答を求めた。実験では質問の異なる 2 種類の課題を実施した。非言語場面と言語場面の図版が交互に提示されるようにし、同じ場面が連続で提示されないように順番はランダムになるようにした。こうした手順を 12 回繰り返した。

2.4 結果の処理法

障害傾向の高低による群わけをしたうえで、言語場面と非言語場面での図版を見終わってから回答を終えるまでの平均反応時間、そして注視領域ごとの注視回数・総停留時間等を求めた。そのうえで、障害傾向・課題・領域間で

の 3 要因の分散分析を行った。自由回答データはカテゴリ一分類を行った。

3. 結果

群わけの結果、本研究参加者の障害傾向高群は 20 名、障害傾向低群は 9 名であった。課題間、障害傾向ごとの平均反応時間を比較した。分散分析の結果、課題の主効果 ($F(1, 24) = 140.8, p < .001$) は有意であったが、障害傾向の主効果と交互作用は有意でなかった。Bonferroni 法による多重比較を行った結果、すべての課題の組み合わせに有意差があった。課題 1 より課題 2 の方が平均反応時間は長く、非言語場面より言語場面の方が平均反応時間は長かった。自由回答データを分類した結果、課題 1 では、「状況理解」が 9.9%、「要求」が 58.2%、「同意」が 0%、「その他」が 31.9% であった。課題 2 では、「提案」が 58.8%、「質問」が 8.8%、「同意」が 1.9%、「説明」が 15.3%、「その他」が 16.7% であった。

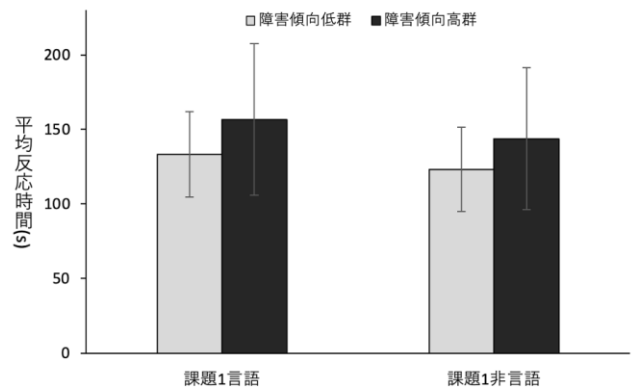


図 1. 課題間、障害傾向ごとの平均反応時間

4. 考察

平均反応時間の結果から、言語場面での間接的要求の理解が困難だった可能性がある。自由回答では、「要求」と回答できた子どもはいたが、「状況理解」や「その他」の回答も多数あり、間接的要求の理解・表出の困難さを示している。自由回答が難しい子どもがいたが、回答方法や実験条件によって、間接的要求の理解ができる可能性がある。

参考文献

- [1] Bucciarelli et al. (2003). *Journal of Pragmatics*, 35, 207-241.
- [2] MacKay & Shaw. (2004). *Child Language Teaching and Therapy*, 20, 13-32.
- [3] Kissine et al. (2012). *Autism*, 16, 523-531.

^{†1} JURI HAYASHI, School of Human Sciences, Waseda University
^{†2} MIKIMASA OMORI, Faculty of Human Sciences, Waseda University